

『嵐が丘』におけるイメージと象徴

Symbols and Images in *Wuthering Heights*

市 原 聡 子*

Satoko ICHIHARA*

論文要旨

『嵐が丘』で繰り返し使われる言葉、〈黒〉〈悪魔〉は、Milton 的に天国との対比でとらえる
と、体制、秩序、伝統に対するロマン主義的反逆であり、同時に個々人のうちに存在する両極
性及び conflict と解釈できる。黒はまた、ヨーロッパ芸術の伝統である femme fatale のイメ
ージとつながる。Catherine の中に femme fatale 的要素が見られることは確かであるが、Cather
ine と Heathcliff の魂の同一性を考慮する時、Heathcliff もまた、Catherine にとって同一の存
在である。2つの魂は切り離せぬ一対のものとして、anima, animus を象徴している。Wuther
ing そのものである psyche が肉体から解放される時、ようやく2つの魂は合一するのである。

キーワード：黒, femme fatale, anima, animus, 魂の解放と合一

野島秀勝氏は、「Lockwood にとって「人間ざらいの理想の天国」と見えた *Wuthering Heights* とその自然性をシンボリックに表す〈嵐〉は、実は人間情念の修羅の地獄のシンボルへと変貌する」と述べている。⁽¹⁾ ‘Wuthering’ は、まさに *Wuthering Heights* のような場所で、嵐の時に起こる大気の動揺を形容したものであり、何も知らない Lockwood は、この言葉に、‘pure, bracing ventilation’⁽²⁾（清純でさわやかな風）をイメージしている。物語りは、出だしから実にアイロニカルであり、‘a perfect misanthropist’s Heaven’ (*Heights*, p. 45) で最初に会うのが ‘black eyes’ をもつ Heathcliff であるということは、ここで既に〈天国＝地獄〉の構図が暗示されていると思われる。‘pure, bracing ventilation’ と見えた ‘Wuthering’ は、ダンテが『神曲』の地獄編で示す、渦を巻く極めて有害な黒い空気といってもいいだろう。そして、この有害な黒い空気は「肉欲の罪を犯した者」に対する罰なのである。このことは、Lockwood 氏が見る夢 ‘Seventy Times Seven, and the First of the Seventy-First’ (p. 64) につながってゆく。野島氏は「七たびの七十倍、そして七十一倍目の初めの罪は姦通罪である。」(pp. 156–157) と述べ、さらに、七十一倍目の罪を「近親相姦の愛」(p. 174) と限定している。この incest theme については幾人かの批評家達が言及し、とらえ方として興味深いところもあるが、作品の中ではそれについての明確な言及もないし、また批評家達の述べる根拠も完全に手放しで受け入れられるとは言い難いので、「近親相姦の愛」については考慮しないことにする。しかしながら ‘red ornamented title’ (*Heights*, p. 64) は、‘red’ のもつ「叛乱」のイメージをまずは示しながら、次に ‘red’ のまた別のイメージである「情熱・情念」を示し、Catherine の幽霊の血の色と

* 弘前大学教育学部英語教育教室
Department of English, Faculty of Education, Hirosaki University

融合するのだが、血の赤によって強められた 'scarlet' によって、「姦淫の罪」をも暗示しているのである。

それにしても、Wuthering Heights という場所と Heathcliff なる人物は、初めから地獄のシンボルを形成するように仕組まれている。Heathcliff に対して用いられる 'black,' 'dark' という言葉については、多くの批評家が指摘しているところであるが、岡田氏は、それらの言葉の用いられ方を詳しく分析している。⁽³⁾ 第一に、風貌についての用いられ方；第二に、彼の邪悪な性格についての用いられ方；第三に、主要な登場人物のひとり、Nelly という語り手による、主観や誤解を含んだ、劇的な高調子の感情による語りによって、Heathcliff の黒のイメージと悪魔性が特に強く浮き出していること；第四に、Heathcliff 自身が、異常に激しい口調によって、自身の暗黒のイメージを強めていることを指摘し、これらがあいまって彼の地獄及び悪魔的イメージが作り上げられるとしている。

'black,' 'dark' は、その他に、Heathcliff が次第に復讐の鬼となってゆくことに対しても、効果的な役割を果たしている。ギリシアの復讐の三女神のひとりエリニュス (Erinyes) の身体の色は黒であり、Heathcliff との共通性が見られる。そのうえ、復讐の三女神の住まう所は、地下の冥界の最も底なる所なのであり、これも地獄のイメージにつながっている。そしてエリニュスの赤い眼——この色は Lockwood の夢の中の 'red ornamented title' と共鳴するのである。なぜなら、(このことについては後で再び触れるが、) (Lockwood が Jabez Branderham の説教を批判した行為によって象徴されるように、) Heathcliff が復讐しようとした対象が、因襲と伝統、体制と秩序であるとしたら、赤は復讐の色であると同時に、社会に対する反逆の色でもあるからである。⁽⁴⁾

反逆と復讐はこのようにして結びつき、Milton の Satan のイメージが Heathcliff に与えられることになる。

『嵐が丘』にはバイロンの影響が大きいだが、その背後にミルトンのセイタン（悪魔）が濃い影を落としている。その悪魔は既成の体制の権威に対する反逆者だった。本来、天国においては光の天使であり、そこから放逐された墮落天使なのだ。『失樂園』には、かつての大天使の首領として、比類なき力量を誇る壮大なセイタンの雄姿が描かれる。天地創造を終えた神は、その一人の子に世界の主宰者として、天上で最高の支配者たる地位を与える。それをすべての天使に宣言し、完全な服従を強制する。セイタンはその正当性を疑い、専制的な神と宇宙に反抗して戦う。神は（愛や知恵によってではなく）強力な雷電によって彼を天国から底なしの地獄に突き落とす。炎の海にのたうち回りながらも、彼は昂然たる誇りを捨てない。「戦いに敗れるとも何かあろう。すべてを失いはせぬ——うち勝てぬ意志、復讐の意図、不滅の憎悪、不屈の勇氣、征服されぬとは、このほかに何がありえようぞ（それが征服されぬ限り、ほかは問題ではない）」こうして両腕から炎をなびかせながら中空に舞い上がる時、巨大な鳥の飛翔にも似た崇高な威厳に包まれる。同志を糾合し、あくまで神の国に戦いをいどむ彼は、結局、敗北して永遠の地獄に落とされる。彼は神によって確立された体制と秩序、圧制的な絶対の権威に対して反抗したのだ。（岡田，pp. 214－215）

Heathcliff はエリニュスたちのように、ただ単に冥界に落ちて来る者たちに復讐するのではない。エリニュスたちは Zeus 以前の原初の神であって、Hades よりも遙か地下の Tartaros に

住み、ここには神々に叛いた大罪者が落とされた。神々であっても、Zeus に叛けばここに落とされた。⁽⁵⁾ 雷^{いかづち}として表される Zeus によって Tartaros に落とされた神々のように、強力な雷電によって fallen angel となった Heathcliff は、まるでエリニースたちから復讐心を吸収したかのごとく、自分をおとしめたものに戦いを挑むわけである。

作中、天国から投げ落とされる構図は、Catherine においてはより明確に示されている。

...; 'I was only going to say that heaven did not seem to be my home; and I broke my heart with weeping to come back to earth; and the angels were so angry that they flung me out, into the middle of the heath on the top of Wuthering Heights, where I woke sobbing for joy.' (pp. 120-121) (天国は私の落ち着けるところではなさそうだと言おうとただけなの。私は悲嘆に暮れて地上に帰りたいと泣いていた、そしたら天使たちがとてもおこって私を投げ出したの、嵐が丘のてっぺんのヒースの原のまん中にね。そこで私はうれしさのあまりすすり泣きながら目覚めたってわけ。)

fallen angel のイメージは、Catherine の風貌およびその他の巧妙なテクニックによって作り上げられている。ひとつには、彼女の眼が Heathcliff と同様に黒であること。しかしながら髪の色は brown であるため、悪魔的色彩はそれほど強くない。夢の中に現れる Catherine に対する Lockwood の評価も、ghost, goblin, chageling, little fiend, wicked little soul 程度のものである。しかし、'a just punishment for her mortal transgressions' (p. 69) (生きている時の罪の当然の報い) は、Jabes Branderham の説く 'Seventy Times Seven, and the First of the Seventy-First' と結びつき、さらには、取り乱した Heathcliff が窓から闇にむかって呼びかけることで、天国とは正反対のもの——地獄を彷彿させる。そして2代目 Catherine が、spectre となって現れた Catherine の娘であることが暗示される時、'..., goa raight tuh t' divil, like yer mother afore ye!' (p. 57) (とっとと悪魔のところへいっちなえ、おまえの母親のように) という Joseph の台詞が効果を発揮する。

Catherine の黒い眼は、小悪魔的イメージとしてとらえられるだけでなく、ヨーロッパ芸術の伝統である〈宿命の女〉としばしば結びつけられる。〈宿命の女〉あるいは〈運命の女 (femme fatale)〉は、通常 'dark lady' で、黒髪・黒眼である。野島氏は、Catherine の黒い眼を、Dante のベアトリーチェや Shakespeare の dark lady の眼に通じるものとして取り上げている。また、これに対峙するものとして、金髪・白皙・碧眼で、男を救済へと導く〈永遠の女性 (Ewig-Weibliche)〉が、やはりヨーロッパ芸術の伝統に見られると述べる。そして2代目 Catherine について、母親と同様、黒い眼をもつにもかかわらず、その他の点——金髪・白皙という点で、永遠の女性に通じており、母、Catherine の 'a second edition' であり、母の色が薄められた複製とみなし、この作品がもつシンメトリックな構造のひとつの項目ととらえている。(野島, pp. 148-150) この〈宿命の女〉と〈永遠の女性〉を、男性にも当てはめてみると、実にシンメトリックな構図と共に、強烈なアイロニーが見えてくる。単純に色を基調として分類すると、Catherine が〈femme fatale〉なのは当然であるが、Heathcliff は髪の色も黒、肌も dark なのであるから、Catherine よりも完全な意味での〈男性版 femme fatale〉といえよう。この2人に相対するのが Linton 家の兄妹であることは明白であって、Edgar も Isabella も〈永遠の女性〉あるいは〈男性版 Ewig-Weibliche〉たる条件を具えている。男を破滅へと導く〈femme

fatale〉として Catherine は Edgar を惑わし、‘..., there will be no saving him——He’s doomed and flies to his fate!’ (p. 112) (彼を救う手だてではない——宿命だわ、運命に向かって飛んでいってる。)と Nelly に思わしめるのである。一方、Heathcliff は Isabella を惑わし、精神的にも物理的にも虜にし、破滅させる。この Catherine 対 Edgar, Heathcliff 対 Isabella という構図の中に、Catherine=Heathcliff というさらなる構図が見られる。既に述べたように、2 人とも、Wuthering Heights, fallen angel, 悪魔、地獄、黒、femme fatale という共通項でつながっており、なによりも、Catherine の ‘I am Heathcliff’ (p. 122) という言葉によって、分離不可能なものにとらえられる。この 2 人にとり憑かれるのが Linton 家の兄妹であるから、当然 Wuthering Heights 対 Thrushcross Grange という構図も存在するわけで、後者については作中でもしばしば天国の image で表現されており、それに対する Wuthering Heights は既に述べたように、地獄の image を伴っている。

ところで、〈femme fatale〉とは、単に黒髪・黒眼で男性を魅きつけて墮落させるだけの存在にとらえてよいのだろうか。松浦暢氏によると、〈femme fatale〉の決定的な公式図、原型は明確ではなく、〈宿命の女〉は妖しい美しさで男の欲望を永遠にかきたてる対象であり、理想主義が極点にたどりつき、conflict を意識の本質的形式としたロマン派文学で、もっとも多彩な開花を見たとしている。〈宿命の女〉の実体については、「まさに男のえがく理想の女性像、ユング流に言えば、アニマ、男の内奥にひそむ女性部分、まだ活性化されていない精神の無意識の未分化部分をえがきだす心の像」としている。「こうしてアニマに憑かれた状態になった芸術家は、自由奔放に、それぞれが好ましいアニマの女性像を創造する」のだというのだが、このアニマ的女性像は、「美しく清純な女神・天使・乙女・妖精」から「恐ろしい魔女・妖婦・娼婦」にいたるまで多様であり、〈ポジティブ〉と〈ネガティブ〉、〈明るい天上的な女性〉と〈地上的で暗い地獄的な女性〉、〈上層部のイメージ〉と〈下層部のイメージ〉、〈靈感を与える女〉と〈宿命の女〉というように、対照性が見られるが、これは同一物の二面性、両極性のあらわれ——言い換えれば、人間性の奥底に潜む両極性のあらわれであるというのである。⁽⁶⁾

Wuthering Heights の場合、芸術家はアニマに憑かれたというより、アニムスに憑かれたと言うべきかもしれない。ここでは登場人物のほとんどが、人間の持つ両極性を——ポジティブな面もネガティブな面も——示し、それがこの途方もない物語りに写実性を与えているといえよう。それぞれが対立概念をかかえつつ、Catherine 対 Edgar, Heathcliff 対 Isabella という構図が存在し、その中心に、もっとも明確な形で〈femme fatale と彼女に翻弄される男性〉のパターンが、Catherine と Heathcliff によって作り上げられている。この作品にみられる多様な対立および対照は、ロマン主義の本質的な特質ともいえるものである。理性↔情熱、伝統↔革命、現実↔理想というような矛盾と葛藤こそ、遙かなるもの・現存しないものを憧れるロマン主義者達が芸術を生み出す推進力となっていたわけで、各々の芸術家が独自の方法でその矛盾と葛藤を克服しようとした。その結果 Coleridge は、ものの本質を変化させ、万物を共生させるもの——相反し不調和な性質の均衡をはかり、和合させるもの——として第二のイマジネーション理論を生み出し、Keats は、万物であると同時に無である詩人の理想像として、Negative Capability 理論を考え出したわけである。松浦氏によると、「ロマン派の宿命の女は〈生成と流動〉の社会にあってもゆるがさない、不動の美の原型、妖しい美女のルーツとなっている。宿命の女の探求は、いつの時代でもかわらない人間の根源的欲望であり芸術的創造の源であり、苦悩にあえぐ現代人のアイデンティティ発見への内的プロセスである。」(p. 292) Emily Brontë

はこのイメージを巧みに用いた。Edgar 亡き後、Nelly に向かって Heathcliff が、‘...she has disturbed me, night and day, through eighteen years....’ (p. 320) (彼女はおれの心をかき乱してきた、夜となく昼となく、18年間……) と言い、さらに、‘She showed herself, as often was in life, a devil to me! And, since then, sometimes more and sometimes less, I’ve been the sport of that intolerable torture! Infernal...’ (p. 321) (彼女は、生前もよくそうだったのだが、おれに対し悪魔の姿をみせた。そしてそれ以来、ときにはひどく、またときにはそれほどもなく、おれはあの耐えがたき拷問によってもてあそばれてきた。地獄だよ……) と言う時、Heathcliff にとって Catherine が <femme fatale> であることは疑いようのない事実となる。それはまさに、「恐ろしい魔女・妖婦・娼婦」、<地上的で暗い地獄的な女性> のパターンであることは既に触れた通りである。しかしそれと対極の要素が Catherine のなかに存在することが、時折みせる深い思いやりや、Nelly による「天使のようだ」という形容によって示されている。

このように、個人のなかの<天国的要素↔地獄的要素>を示しながら、さらに大きな枠組みで<天国↔地獄>の構図が設定されている。本論の出だしで述べたように、Wuthering Heights は Lockwood にとって、一見「理想の天国」だったが、様々な暗示と共にやがて地獄のシンボルへと変貌し、それに対する天国は Thrushcross Grange となるわけである。天国にふさわしく、Edgar と Isabella は天使のようであり、<Ewig-Weibliche> のように金髪・白皙・碧眼である。この<天国↔地獄>の構図については、様々な解釈がある。テリー・イーグルトンは、この対比をマルクス主義批評の立場からとらえ、<屋敷>対<丘>は、<大規模農業資本主義の代表たる地主階級>対<時代遅れのヨーマン>を表すのであり、Heathcliff は<丘>出身でありながら、「<丘>と<屋敷>のどちらにも、中途半端なかたちでしかむすびつかず、どちらにも敵対する」と述べている。⁽⁷⁾ 即ち Heathcliff は「農業社会の外で、だれにも知られることなく資本を蓄積」し、「地主階級の土地に侵入し、土地から利益をあげるのに成功していた同時代のブルジョワ階級」と同じ行為を<屋敷>に対して行ったというのである。(イーグルトン, pp. 264—265)

ヒースクリフは主体としてみれば、<屋敷>に反抗し<丘>の側にたつ人物である。そして客観的にみると、彼は<丘>を突き崩す<屋敷>の側にたつ人物である。彼はふたつの世界のあいだの矛盾をくっきりと浮かびあがらせる。彼が権力を手にいれるということは、抑圧された者が資本主義に勝利することを象徴すると同時に、資本主義が抑圧された者に勝利することも象徴しているのである。

彼こそ矛盾の体現そのものである——進歩的であるとともに時代おくれでもあり、<屋敷>が代表する農業資本主義の力を戯画化する人物であると同時に、そのような勢力に、伝統的な立場から異議を申したてる反逆者でもある。農業資本主義の力を利用して彼は<屋敷>をうち負かそうとする、同じ土俵で相手を倒そうとする。(イーグルトン, p. 260)

このように、イーグルトンは Heathcliff の経歴を、「<丘>と<屋敷>とを矛盾にみちたまま共存させることで、同時代のイデオロギー的ジレンマのありようを、まさに身をもってしめす」(p. 265) ものとしてとらえた。

<天国↔地獄>の、もうひとつの解釈は、先に引用した *Paradise Lost* にもとづくもので、

Heathcliff の凄まじいまでの生きざまに宇宙的な戦いを投影する。絶対服従を強いる神は、たとえ自分につかえる天使といえども、不忠なもの、批判的なものに対しては容赦せず、地獄に落とし入れる。神および神の権力は、キリスト教を基盤として確立されたヨーロッパ文明の体制、秩序、伝統であり、*Wuthering Heights* ではそのような社会の中で裕福に暮らし、かつ権威を行使する人々の代表として Edgar Linton が位置づけられる。Heathcliff は「ミルトンのセイタンのように、昂然たる誇り、不屈の復讐の意志をもって、因襲社会の強固な権威——敵の一人のリントンは治安判事である——に立ち向かう」（岡田, p. 216）のである。このロマン主義的な解釈は、Heathcliff の姿に、Milton と同様の「既成の神を恐怖と圧制のシンボルと見て、社会の因襲的体制に歪められた人間が、自らの生命によって解放されること」（岡田, p. 215）への願いを見ている。

伝統や体制の中に埋もれ窒息することを拒み、自らの情熱や意志を芸術において貫き通そうとしたロマン主義者達の作品を見わたす時、Keats の叙事詩 *Isabella, or The Pot of Basil* (published in 1820) に、*Wuthering Heights* (published in 1847) の〈Heathcliff 対 Isabella Linton〉の関係との共通点あるいは反転的一致が幾つかあることに気がつく。Keats の *Isabella* は、松浦氏によると、「ひたすら恋人の愛の告白を待ちわびる控え目な女性」であり、「いわば、男しだいで変わる清純タイプの宿命の女」（p. 36）である。この詩は Boccaccio の *Decameron* を基としており、Isabella はフィレンツェの名家の娘であるから、〈femme fatale〉にふさわしい黒髪・黒眼と考えられる。この美しい清純な乙女が、その家の使用人である Lorenzo と愛し合うようになる。Isabella の描写、2 人の愛の描写には、あらゆる事物の中に美の原理を求めた Keats の 'beauty is truth, truth beauty' の理念が生かされている。

一方、*Wuthering Heights* の Isabella の場合、何度も述べたように、髪の色も眼の色も〈femme fatale〉の伝統にはそぐわない——むしろ反対のイメージをそなえている。では〈Ewig-Weibliche〉として男を救済へと導く役割を果たしたのかという点については、ある意味ではそうかもしれない。なぜなら、Heathcliff は Isabella と結婚することで、結局のところ Linton 家の財産を手に入れることになったからである。しかし財産を得ることで Heathcliff の精神が満たされ、心豊かに安らぐことにはならず、救済されることにもならない。他の登場人物と同様、Isabella もまた両極性をもちあわせた人物として描かれ、一方で天国のイメージの Thrushcross Grange にふさわしい天使のような描写がなされるのに対し、もう一方では、嫉妬と激情に駆られた行為の描写がなされる。即ち、Isabella の目について、'They are dove's eyes——angel's!' (p. 145) (鳩の目——天使の目だわ) と形容する Catherine の言葉や、'...chanced to be feeding some pigeons in the court.' (p. 149) (たまたま中庭で鳩に餌をやっているところでした。) という行為は、Keats の *Isabella* と結びつき、プラスのイメージを生むが、それと対立するマイナスのイメージが次の描写に見られる：'She grew cross and wearisome; snapping at and teasing Catherine continually,....' (p. 140) (彼女は不機嫌で退屈するようになって、絶えずキャサリンにきつい口調で話したり絡んだりする……) また、義姉の Catherine に対し、はっきりと Heathcliff をめぐって自分の恋敵よばわりし(実際そうなのであるが)、身を引くように宣言する。そして Heathcliff の魂に矢を打ち込んで永久に虜にし、彼の心の中の義姉の映像を完全に忘れさせてみせると、自信のほどを示すのである。(p. 144) こうしたマイナスのイメージは、人間誰しもが多かれ少なかれ持っている要素であって、主要登場人物の各々に両極性を付与することで、現実性・写実性が生み出されるのであり、Isabella のネガティブな要素が

Heathcliff を破滅させたとみる者は、誰もいないだろう。むしろ Isabella の恋心を利用し、自らも思いを寄せているそぶりをして駆け落ちを勧め、まんまと思い通りに事を運んだ Heathcliff の方が、Isabella を破滅させたと見える。そういう意味で、先に述べたように、Isabella 対 Heathcliff の場合、Heathcliff が〈男性版 femme fatale〉なのである。

Keats の *Isabella* との共通点は、もうひとつある。Lorenzo も Heathcliff も社会的に身分が低い点である。Heathcliff の出生状況を考えると、大きな屋敷の召し使いにもなれないほどで、むしろ Lorenzo よりも低い地位に甘んじるべきなのであろう。そのような意味で、Isabella Linton が Heathcliff に恋心を抱いたことは、Isabella 対 Lorenzo の関係と共通する。しかし明確な性格を示さない Lorenzo との関係に較べて、信じ難いほど強烈な個性をもつ Heathcliff との関係は単純ではない。Lorenzo の Isabella への愛について、下心があったかという疑問に答えるすべはないが、Heathcliff には大いなる下心——復讐心があることは明らかで、Isabella に対する心情も、愛とは正反対のものであったかもしれない。Isabella Linton の方も、経済力も何もないままの Heathcliff であったなら、恋心を抱かなかったかもしれないのである。

ところで、Keats の Isabella の家はフィレンツェの名門であったが、その地位と豊かさは、労働者の搾取の上に築かれている。

14

この美しい乙女は 二人の兄たちと住んでいた、
先祖代々の商いによって 富み栄え、
松明をともした抗道や 騒々しい作業場で
かれらのために 多くの疲れた腕が酷暑に弱り果て、
多くの かつて誇らかに矢筒をさげた男たちの腰は
血みどろに鞭打たれ 生気を失くした。——多くのものが
目をくぼませて 終日 砂金のある河に立ち、
その流れから 金ぴかの流砂をすくった。

15

かれらのために セイロンの潜水夫は息をつめ、
飢えた鯨に 真っ裸で向かって行った。
かれらのために その耳は血を吹き、かれらのために
氷山のうえの海豹は あわれな鳴き声をあげながら
満身に投槍を受けて 死に倒れた。かれらだけのために
千の人々が さまざまの暗い苦悩に煮えかえった。
半ばなにも知らずに かれらは楽々と車輪を回し、
それが 働く者を ひどい艱難に陥れた。⁽⁸⁾

フィレンツェの名門の家に対応するように、Linton 家も、イーグルトンの言葉を借りると、農業資本主義社会の地主階級で、搾取する側である。Keats の Isabella は搾取される者たちの苦悩については「半ばなにも知ら」ないのであるから、まるで泥の中から咲き出る清らかな蓮の花のごときである。そして Lorenzo もまた、ただ愛と情熱に身をささげるのみである。しか

るに Heathcliff は自らもブルジョワジーという搾取する側に身を置き、Keats の *Isabella* における 2 人の兄にも匹敵するほど、残忍な搾取りを示す。彼は毒に毒をそそぎ込むがごとく、自ら泥の中に浸るのである。なにゆえに泥に浸らなければならないのか。それはひとえに Catherine との合一を願うからである。

Keats では、2 人の兄によって殺害された Lorenzo の墓を Isabella が掘り起こして、その生首を切断して持ちかえる。そしてそのされこうべを鉢の中に隠し、されこうべを栄養分として basil を育てるのである。この行為について松浦氏は次のように分析している。

夜の墓あばき、生首の切断というのは、いかにもゴシック・ロマンス的怪奇趣味にみえるが、じつはそうではない。ひとつには、作者が〈愛は永遠〉という昔からの真理の再確認を、ここでイザベラの狂気じみた行為をとおして、おこなったのである。いまひとつは、もち帰ったロレンゾの生首を、死から生への再生のシンボルとして扱おうとしているのである。(pp. 42-43)

さらに、松浦氏によると、毒と薬の効能を持つ basil が首の入った鉢に植えられたということは、生と死、愛と死の二面をつなぐ仲介の意味をもつが、実は鉢 (=pot) 自体も、生命の誕生と同時に冥界 (=死) のイメージをあわせもっている。さらには、回春、再生、豊じょうを暗示するとしている。そしてこの論を裏づけるべく、ゴールニヒトの言葉——「〈墓穴の核心〉である〈頭蓋骨の種子〉から新芽がでる。つまり創造は破壊から、成長は腐敗から生まれる」を引用している。(pp. 44-45) しかし、2 人の兄は basil の鉢さえも奪ってしまう。鉢の喪失は、「来世での合一も否定されたこと」(松浦, p.48)を意味し、Isabella は悲嘆と絶望のあまり狂気のうちに死んでゆくのである。

〈墓あばき〉の行為は、*Wuthering Heights* では 2 度行われる。最初は Catherine が死んだ時である。

The day she was buried there came a fall of snow. In the evening I went to the churchyard.... I got a spade from the toolhouse, and began to delve with all my might—it scraped the coffin; I fell to work with my hands; (p. 320) (彼女 (= キャサリン) が埋葬された日は雪だった。日没後、墓地へ行った……物置から鋤をもってきて力の限り掘りはじめた——すると鋤が棺をひっかいた；おれは穴の中へ降りて両手で作業をした；……)

彼は棺おけの中に Catherine と共に横たわり、そのまま埋もれてしまうことを願うが、その時、誰かのため息、人の気配を感じとる。‘..., so certainly I felt that Cathy was there, not under me, but on the earth.’ (p. 321) (確かにキャシーがそこにいるのを感じた、地の下ではなく、地の上にいるのを。)彼女は Heathcliff が再び墓を埋める間彼と共にいたので、彼はずっと彼女が自分のそばにいてくれるものと思っていたがそうではなかった。それっきりで終わってしまった彼女の気配をもう一度感じとりたい、彼女にひと目会いたいという思いにさいなまれて 18 年間苦しみ悶えた。彼女が生きている間もよくそうであったように、死んでからも彼女は彼にとって ‘a devil’ であり続けた。その苦しみに終止符が打たれるのは、2 度目の〈墓あばき〉

の時である。Edgar が埋葬される時、Heathcliff は墓掘り男に Catherine の棺をおおっている土をも取り除かせて棺の蓋を開けさせる。その顔はまだ生前の面影をとどめ、‘passionless’ (p. 320) な表情であった。この時彼は Catherine の棺の片方はずせるよう細工を施し、死後、自分の棺も片方はずして同じ場所に埋葬されることで、あの世での合一を図る。そしてこれ以後 Heathcliff は自身の死を待ちわびることになる。

このように Keats の Isabella では、〈鉢を育てること＝あの世での Lorenzo との合一に対する希望〉から〈鉢の喪失＝合一に対する絶望〉、そして死へと移行するのに対し、Heathcliff では、〈1 回目の墓あばき＝Catherine と合一できないことによる18年間の苦悩〉から〈2 回目の墓あばき＝自分自身も passionless になって死ぬことにより Catherine と合一できるという希望〉から死へと移行する。即ち Keats では、再生のイメージは断ち切られているのに対し、*Wuthering Heights* では、再生のイメージが核となって終りを迎える。この再生のイメージをささえているのが2代目 Catherine と Hareton であることはいうまでもないが、もうひとつの要素として、Catherine との合一が地上でなされるということが考えられる。Heathcliff と復讐の女神エリニウスとの共通性については即ち述べたが、実はエリニウスは、冥界＝大地との関係から、多産豊穡のシンボルでもあることが知られている。

それでは Heathcliff と Catherine の合一が何故地上でなされなければならないのだろうか。Catherine は、自分の死期を悟って、Edgar には、教会にあるリントン家の先祖代々の墓に入ってもかまわないと言いながら、自身は教会の墓などには入らないと言う。彼女の ‘resting-place’ は ‘in the open air with a headstone’ (p.165) でなければならない。たとえ地上であっても、教会ではだめなのである。*Paradise Lost* の最後で、アダムとイブが手に手をたずさえて歩き出すように、Catherine が Heathcliff と行こうとするのは地上であり、大地に他ならない。Milton の天国対地獄の戦いは、様々な象徴として解釈される——それは人間個人の内に存在する両極性のシンボルとしても解釈され、善↔悪、理性↔情熱、霊↔肉、陽↔陰、super-ego↔Id 等、枚挙にいとまのないほどである。しかしこれらを合わせ持ち、常に conflict をかかえているのがこの地上に存在する人間であって、*Paradise Lost* における壮大な戦いのイメージをヒントにして、Emily Brontë は、ロマン主義的人間賛歌を造りあげた。

世界が、——そうだ、安住の地を求め選ぶべき世界が、今や
 彼らの眼前に広々と横たわっていた。そして、摂理が彼らの
 導き手であった。二人は手に手をとって、漂泊の足どりも
 緩やかに、エデンを通して二人だけの寂しい路を辿っていった。⁽⁹⁾

しかるに、この地上で肉体をそなえているうちは、あらゆる体制、秩序、伝統によって拘束される。Catherine は、死後においても、教会という既存概念の象徴に拘束されることを嫌っている。岡田氏は Emily の詩の分析から、彼女の天国について次のように述べる。

彼女の夢みる天国はキリスト教的な天国ではない。彼女の「永世」はキリスト教的な復活の望みとは無縁である。……現世の肉体は、死によって、教会の床下に眠る母たちのように、大地に包まれて眠るだろう。

そして「目ざめたら」新しい生命が無限の世界に生きる。……

彼女にとって、「死」とは「大地に包まれる」こと、大地との完全な合一、大地との一体化である。……土牢——現世という土牢がとけてくずれ、それを包む世界との障壁がとり去られて、区別もなくなる。それがエミリにとっての死であり、解放である。彼女は自分の存在から自由に解放され、普遍的な力と一体になる。

……死は平和の世界であり、地上の人間の心を引き裂く相戦う要素を、善と悪とを調和させ、結合させる力である。(pp. 178-180)

Catherine の言う‘this shattered prison’（このめちゃめちゃになった牢獄）とは自身の肉体であり、現世なのであり彼女はその牢獄に閉じ込められていることにうんざりし、‘that glorious world’へ逃げ出して、いつまでもそこに住みたいと思っている。(p. 196) この‘that glorious world’は、先ほど引用した‘my resting-place’や‘the open air’と同一の所であり、‘my soul will be on that hill-top’ (p. 165) と述べられる場所と同一と考えられる。それは天国ではなく、地上の、それも Wuthering Heights のある heather の茂る moor なのである。

ところで、Catherine が切望する‘that glorious world’に行くためには、Milton におけるように、「手に手をとって」行く相手が必要なのである。そのことは Catherine も Heathcliff も、互いに認め合っている。Catherine は、自分自身が Heathcliff であると明言しており (p. 122)、死の前にも、Heathcliff と別れたくない；お墓に入っても安らかに眠らない；（自分はヒースクリフなのだから、——自分の魂の中に存在しているのだから）自分の Heathcliff をいっしょにお墓に連れて行くと述べる。(p. 196) Heathcliff もまた、Cathy に対し、自分の命と呼びかけ (p. 194)；Catherine 亡き後自分はどのように生きられようか、彼女の魂である自分と墓の中で暮らそうじゃないか (pp.197-198)；自分を殺した人間 (=Catherine) を愛すると述べるのである。(pp.197-198) さらに Catherine が死んだ知らせを聞いて、彼は次のように言う。

....Where is she? Not there-not in heaven-not perished—where? Catherine Earnshaw, may you not rest, as long as I am living!I *cannot* live without my life! I *cannot* live without my soul! (p. 204) (彼女はどこにいる。あそこじゃない——天国じゃない——滅びてはいないんだ——それではいったいどこにいるんだ。……キャサリン・アーンショー、おれが生きている限り安らかに眠らないように。……おれはわが命なくして生きることができない。わが魂なくして生きることができない。)

このように2人の魂は一对のものであり、どちらか一方が欠けても不完全なのである。Catherine は Heathcliff にとって <femme fatale> であり、Heathcliff は Catherine にとって <femme fatale 的役割> をもつのである。それは <femme fatale> が、ゴシック流に言えば、「男性の内奥にひそむ女性部分＝アニマ」をえがいたものととらえられるように、Catherine は Heathcliff の <anima> を、Heathcliff は Catherine の <animus> を、シンボライズしているといえるのではないか。<animus> は、女性のうちにひそむ無意識的な抑圧された男性的要素で、敵意、悪意、憎悪、意図、意志、生命力を表すものとされる。こうしてみると、Heathcliff があれほどまでに悪魔的な憎悪や復讐、暴力と強固な意志を示すこと、Catherine 亡き後、20年生き続けることもうなずける。また、Heathcliff は Catherine を「自分の命であり魂である」

と述べているが、anima は、既に述べたユング流の意味に加えて、魂、精神、生命の意味がある。そして魂=psyche は、もともと「^{いき}氣息をはく」ことと関係があり、人が死ぬと死体から抜け出し、あの世に行って幽霊のような存在になると考えられたが、「氣息」あるいは「氣息をはくこと」は、空気や風と密接に関係づけられていた。さらに、psyche は肉体と無縁の神的由来をもつものとして、肉体は psyche をとじこめておく墓場であり牢獄なのであり、肉体が減びるとき、真に解放されるという説も生まれた。¹⁰⁾

Catherine と Heathcliff は、互いの anima, animus の具現としてシンボライズされ、2人の魂は一对のものとして切り離すことができない。なぜならその魂 (psyche) は、Wuthering Heights の空気であり風であるからで、自然のあらゆる性質——美しさと醜さ、明るさと暗さ、冷たさと暖かさ、激しさと静けさ、苛酷さとやさしさを表しているからである。そして2人の魂が肉体から解放されることで、なによりも自然の自由と奔放とが強調されることになる。

注

1. 青山誠子, 中岡洋編 『ブロンテ研究』 開文社 1983, p. 145。
2. Emily Brontë, *Wuthering Heights* (Penguin, 1984), p. 46。
3. 岡田忠軒 『嵐が丘』の世界を求めて』(桐原書店 1981) の25,26章参照。
4. Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery* (North-Holland Pub. Co., 1974)。
5. 高津春繁 『ギリシア・ローマ神話辞典』 岩波書店 1987。
6. 松浦暢 『宿命の女: 愛と美のイメージラリー』(平凡社 1987) のプロローグ参照。
7. テリー・イーグルトン 大橋洋一訳『テリー・イーグルトンのブロンテ三姉妹』 晶文社 1991, p. 265。
8. ジョン・キーツ 出口保夫訳『キーツ全集2』 白凰社1974, pp. 67-68。
9. ジョン・ミルトン 平井正穂訳『失樂園』 筑魔書房 1979, p. 573。
10. anima, animus, psyche については、『哲学事典』(平凡社, 1971) 参照。

(1997. 7. 31受理)